

ブダペスト通信

盛田 常夫



2025年 No. 13 (4月11日)

スキージャンプシーズンが終了



小林一札幌大会優勝 (FIS 提供)

2024-25年のスキーシーズンが終わった。残念ながら、アルペン競技で日本人選手を見ることはできないが、スキージャンプや複合、フリースタイルスキーでは日本人選手が活躍している。今年も、日本の主役は小林陵侑だった。

今シーズンのスキージャンプ W 杯は、2024年11月23日のリレハンメル大会から2025年3月30日のプラニツァ大会まで、4か月で29試合の個人戦が行われた。例

年、好調な選手が連続で勝利するパターンが続くスキージャンプだが、今年は例年になく、好調な選手が何度も入れ替わる面白いシーズンになった。

優勝者が入れ替わる

開幕から8戦中5勝と好調な出足を見せたドイツのパシュケは、昨シーズンに1勝ただけで、W杯で表彰台に上がった数も、わずか3回という中堅選手である。実績のないパシュケが今シーズンは開幕から絶好調で、ジャンプ週間の有力な優勝候補に躍り出た。ところが、である。パシュケの快進撃はジャンプ週間前に失速し、その後はシーズン終了間際まで低迷を続けることになった。スキージャンプでは珍しい現象ではないが、一つタイミングが狂うとまったく異なる結果になる。踏切のタイミングは10分の1秒単位で決まる。遅れても、早まっても、滑走のパワーをスキーに伝える力のロスが生じる。脚力のパワーや飛行技術以外の踏切感覚が、ジャンプ台の形状や選手のコンディションによって異なるので、同じ結果を出し続けるのが難しい競技である。

ちなみに、パシュケ34歳でのW杯勝利は年齢で見ると歴代5位で、歴代1位は葛西紀明の42歳。葛西は札幌大会でW杯に今シーズン初めて参戦し、札幌の第2戦で予選を通過して、W杯本選出場記録を52歳8か月、W杯通算出場を579回に伸ばし、前人未到の記録を更新している。

失速したパシュケに代わって台頭したのはオーストリアの若手の有望株チョフェニックと、すでに歴史に残るジャンパーとなっているクラフトである。今シーズンの伝統のジャンプ週間は経験のあるクラフトに軍配が上がるかと思っていたら、なんとチョフェニックが総合初優勝を遂げ、クラフトは2度目のジャンプ週間総合優勝を逃した。チョフェニックはその直前の大会で初めて勝利し、21世紀に生まれた選手として初めてのW杯1勝を上げた。それほどまでに、W杯で一つ勝つのが難しい。そこから、チョフェニックは今シーズン8勝を上げ、2024-25年シーズンの総合優勝の栄冠を得た。

そのチョフェニックも、ジャンプ週間後に調子をやや落とし、そこから調子を上げた小林が札幌大会で2連勝した。世界選手権の中断を経た最初のW杯ホルメンコーレン大会でも勝利し、W杯3戦連続勝利を飾った。シーズン前に体調を崩し、ジャンプ週間までトップテンに入ることもできずに低迷していた小林だが、いったん日

本に帰国して調整し、そこから本来の力を取り戻した。今シーズンはもう勝てないと思っていたが、調子を上げて3勝してW杯通算優勝記録を35に伸ばし、歴代7位まで順位を上げた。すでに多くのレジェンドたちを追い越し、歴代トップ5まであと4勝に迫っている。小林選手は最終盤の追い上げで、総合9位でシーズンを終えた。前半戦の不調でやや悔いの残るシーズンだったが、ジャンプ週間以後の活躍は上々というべきだろう。世界選手権のラージヒルでも、銅メダルを獲得した。

W杯終盤も小林の調子は落ちなかったが、それ以上の活躍を見せたのが、スロヴェニアのドメン・プレヴツである。スロヴェニアの選手はプラニツァのフライングジャンプ台で練習しているので、フライング競技にめっぽう強い。プレヴツ家はスキージャンプ一家で兄弟姉妹がみなジャンプ選手である。そのプレヴツが最終戦で254.5mを飛び、小林選手が持っていたジャンプ台記録（252m）を更新する世界記録をマークした（<https://www.youtube.com/watch?v=byJTmcQNjyU>）。

プレヴツ妹のニカ・プレヴツはノルウェイのヴィケルソンのフライング台で236mの女子世界新記録をマークし、兄妹で世界記録を保持することになった。この兄妹は世界選手権ラージヒルでも金メダルを獲得する快挙を成し遂げた（<https://www.youtube.com/watch?v=97vaZ3pSkIw>）。

このように、今シーズンの男子ジャンプは10名の選手が交互に勝利するという例年になく混戦のシーズンになった。小林のシーズン3勝はチョフェニック8勝とパシュケ5勝に次ぐもので、最後に帳尻を合わせたのはさすがである（小学生時代の小林陵侑と高梨沙羅の貴重な映像：<https://www.youtube.com/watch?v=Ic5aHpObtHk>）。

ニカ・プレヴツは高梨の記録を破れるか

今シーズン15勝した女子のニカ・プレヴツはまだ20歳である。シーズン15勝は高梨の記録（2013/14）に並び、シーズン10戦連勝も高梨に並ぶ記録である。高梨の記録は女子ジャンプの黎明期の記録で、今ほどには有力選手はいなかった。プレヴツの記録の価値は高いが、高梨のW杯通算63勝（男女を通して世界記録）にどこまで迫るかが、これからの見どころである。

その高梨だが、2012年のシーズンからW杯に参戦しており、今シーズン初めてトップテンを外れる総合12位でシーズンを終えた。とはいえ、男女を通して、これだけ息長くW杯に参戦し、トップのポジションを維持している選手はいない。すでに女子のレジェンドだが、やや意外な弱点が見えた。

3月15日のヴィケルソン（ノルウェイ）のフライングジャンプ台で行われた競技で、高梨はわずか140mしか飛ばず、優勝したプレヴツとは70mもの飛距離の違いがあった。日本選手では伊藤有希がフライングを得意とし、200mに近い距離を出したのと対照的である。女子選手のフライング台での競技が始まってまだ数シーズンで、高梨はフライング台での経験がほとんどない。通常のジャンプ台と違い、滑走速度が上がり、風圧が一挙に高まるジャンプ台では、経験の浅い選手の参戦は許可されない。経験のある選手でも、恐怖心から逃れられないという。不慮の事故を避けるために、この競技への女子選手の参加は15-20名の上位選手に限定される。高梨ほどの経験があっても、フライング台の競技は簡単ではないのだ。日常的に練習する台がなければ、フライング競技で上位に食い込むことは難しい。

ヴィケルソンの大会では風が吹いていたこともジャンプを委縮させた要因である。この大会では風のため、2回目がキャンセルされている。風にあおられると落下の危険があり、通常のジャンプ台とは比べ物にならない恐怖心が生まれる。

ヴィケルソンの台は、飛行の高さは着地スロープに並行しているのだからそれほど高い位置を飛ぶわけではない。これにたいして、プラニツァの台では踏切り直後の飛行高度はスロープから10m近くもなるので、空を飛んでいるように見える。まことに壮観である。3月末のプラニツァ大会は比較的天候が安定した時に開催されるので、W杯の最終戦に使われる。ただし、重大事故の回避のために、この台は女子選手の競技に使われない。

ノルウェイ・チームのスーツ改造問題

今年の世界選手権（ノルウェイ）では、女子複合個人ノーマルヒルで葛西優奈・春香姉妹が金メダルと銅メダルをとるという快挙を成し遂げた。小林はラージヒルで4位となったが、上位のノルウェイ選手が失格となったために、繰り上がって銅メダルを獲得した。この時の失格理由が、「suits manipulation」である。

スキージャンプ選手のスーツは体の線に比べ、かなり余裕をもって縫製されている。風の抵抗を減らす、体に密着したアルペン選手のスーツとは正反対に、より多くの風を受けようとしてスーツの面積を広げるためだ。そのため、体の線からどの程度まで大きくできるかの許容範囲規定があり、そのチェックにひっかかると失格になる。ただ、この検査にはかなり主観が入り込む余地があり、現在では電子計測機器が使われている。それでも、ジャンプ・チームはなんとか検査を潜り抜ける方法がないかと、工夫を重ねている。

ノルウェイ・チームの再縫製の詳細は明らかになっていないが、内股部分の縫製をいったん解き、そこに伸縮性のあるバンドを縫い付けて、再縫製したようだ。検査の時にやや引っ張り上げることで体に密着し、飛行時には広がって風を受けるようにしたスーツの改造である。

今回のノルウェイの場合は、一度検査に合格したスーツを再縫製する作業を秘密裏に行っており悪質性が高いと判断され、そのため、世界選手権以後の W 杯からノルウェイのコーチ陣とトップ 5 選手の資格停止処分が決定された。シーズン終了とともに、この決定は解除されたが、押収されたスーツの分析が進行中で、最終的な審判はまだ下されていない。

ポーランドのジャーナリストが再縫製現場を秘密裏に撮影したビデオが、FIS（国際スキー連盟）に持ち込まれて、この改造が発覚したと言われている。複合選手のスーツにも改造が行われていると訴えられたが、その訴えは認められなかった。しかし、コーチ陣が改造にかかわり、選手自身もそれを知っていたことから、厳しい裁定が下された。

多分、ノルウェイのスーツは選手間で話題になっていたのだろう。それを聞きつけた記者が証拠集めを行った。多数の関係者を巻き込む、あまりに大掛かりな改造だったことが、事態の発覚につながった。これまで他の選手団でも種々の検査逃れの方法が話題になっていたので、選手はスーツ改造にそれほどの罪悪感を持っていなかったと思われる。せっかくの世界選手権開催国となったのに、汚点を残したノルウェイ大会になった。

これからはいったん事前検査を通過したスーツはすぐに選手団に返されることなく、競技開始直前に渡されることになるようだ。それほどまでに、スキージャンプに与える風の影響は大きい。トップ選手の順位はどんな風を受けるかで決まると言っても過言ではない。踏切から着地までの間、種々の方向から風を受けるので、紙

一重の差は「風の運」によって決まる。だから、ノルウェイ・チームはせめて向かい風を最大限に利用するスーツの改造に苦心してきたのだろう。日本チームは選手もコーチ陣も層が薄く、お金もないので、そこまで知恵を働かす余裕をもっていなかった。